

# 産業厚生常任委員会所管事務調査報告書

## 第1 調査事項

高齢化社会における、地域の関わりと生きがいについて

## 第2 調査期日及び場所

令和元年11月26日(火) 札幌市 株式会社 MOE ホールディングス  
令和元年11月27日(水) 空知管内 上砂川町  
令和2年 2月 5日(水) 士幌町総合福祉センター 総合福祉調整室

## 第3 参加者

委員長 森本 真隆 副委員長 大野 明  
委員 大西 米明、加藤 宏一、曾我 弘美  
保健福祉課 課長 堀江 菜穂子  
担当主査 佐藤 敦子  
担当主査 渡辺 将  
事務局 総務係長 宇佐見 和重

## 第4 調査の経過と概要

本町は、介護保険法(平成12年4月施行)の規定に基づき、士幌町地域包括支援センターを設置し、町民の心身の健康の保持及び生活の安定のために必要な援助を行うとともにその保健医療の向上及び福祉の増進を包括的に支援している。

今後、日本の総人口が減少に転じていくなか、高齢者の占める割合は増加していくことが想定されており、本町における高齢化率(おおむね65歳以上の高齢者人口が総人口に占める割合)も上昇傾向にある。更なる高齢化が進む中、地域とのつながりや生きがいの有無が、町の目指す福祉行政に大きく影響するものと考え、調査を行った。

### 1. 株式会社 萌福祉サービス 有料老人ホーム「フルールハピネス ていね」

#### (1) モエ de ワークの取組

2017年より高齢者が施設にいても「社会で活躍し続けることができる仕組みの構築」を目的に、協議を重ねられて2018年12月に一般社団法人「モエ de ワーク」が設立された。

#### ① 「従属的生活」からの脱却

介護施設の生活で「従属的な生活」がもたらす問題のひとつとして、「サービスを提供する側とサービスを受ける側のパワーバランスの偏り」が虐待などを引き起こす要因になっていると行っても過言ではないのに加え、主体的な行動や自立した生活を求める意欲が薄れる傾向にあり、その結果「身体機能の低下による介護度の

変化」や「家族負担の増大＝社会保障費の増大」などに繋がると考えられている。

②「仕事」を通して主体的な生活を

利用者が生活する上で困難なこと、できないところは介護サービスや介護施設の機能を活用し、施設は自身の住居であり町内会（社会）であるという考えで、それぞれが役割を持ち、主体性を持って施設運営に参画できる仕組みを「仕事＝モエ d e ワーク」を通して構築している。

③なぜ「仕事」なのか？

利用者も過去に社会で経験をしてきた「技術」や「知識」を通して「人に必要とされている（承認欲求）」実感を得ることができ、それが「自己実現欲求（新たな活力＝自助）」に繋がる。

④利用者の「経験」と「残存能力」を評価し仕事内容を選定

利用者がこれまで経験されてきた仕事やスキルと残存能力を評価した上で、能力レベルと安全性ランクを分けて実施し、その方のランクに応じた仕事を選定している。

⑤仕事内容

菓子箱制作の内職、入居者へのメイク・施設の喫茶コーナー従事、近隣幼稚園への手編み靴下・新一年生へ入学のお祝い到手製雑巾の作成など。

⑥仕事に対する報酬

仕事内容別にポイント制度を導入し、ポイントはいつでも現金交換できるシステムを構築しており、仕事で貯めたお金でお孫さんへのクリスマスプレゼントを購入すると楽しみにしている方もいる。

⑦現在の登録者数

2018年12月の設立からの1年半で、施設利用者99名中31名の利用者が登録をしている。

また、登録者の年齢は73歳から最高齢94歳までと幅広く、中には要介護1であった利用者が「モエ d e ワーク」で仕事を始め半年で要支援2の認定を受け、施設を変えられて出張サービスとして業務を続けている方もいた。

(2) 介護施設運営の新たなモデルケースを目指して

介護業界の大きな課題とされている「人手不足」や「業務負担」。団塊の世代が後期高齢者となる2025年にはさらにその課題は深刻化するとされている。

そんな中「モエ d e ワーク」は、施設運営に関わる業務の一部を担っており、利用者と職員が共に支え合いながら施設を運営することで、職員の業務負担削減や働き方改革にも寄与するとの考えから、相互のパワーバランスの均衡が図れることで、健全かつ新しい介護施設の運営モデルケースの確立ができると考えて取り組まれている。

2. 上砂川町

(1) 概要

北海道空知管内のほぼ中央に位置し、気候は南北の山が強風をさえぎり、温暖で降雪量も比較的少なく、自然環境に恵まれた住み良い町です。

昭和62年の三井砂川炭鉱の閉山により人口は減少しましたが、町民の皆さんが町を明るく元気付けようとボランティア活動やイベントを開催するなど自発的に様々な活動を展開しており、町としてもこのような活動の輪を広げるためサポートしています。

現在、上砂川町では町民の皆さんが住み慣れた町で希望をもって安心して暮らせるまちづくりを推進しています。上砂川町には、人の心の温かさ、豊かな自然、たくさんの笑顔があります

#### ①現状 (R1.10.1 現在)

人口：2,902人、世帯数：1,743世帯、面積：39.98km<sup>2</sup>

65歳以上人口：1,467人(50.6%)

75歳以上人口：852人(29.4%)

要介護要支援認定者数：305人(R1.10.25現在)、その他：国道、鉄道、道の駅等々がない。

#### ②人口等の推移

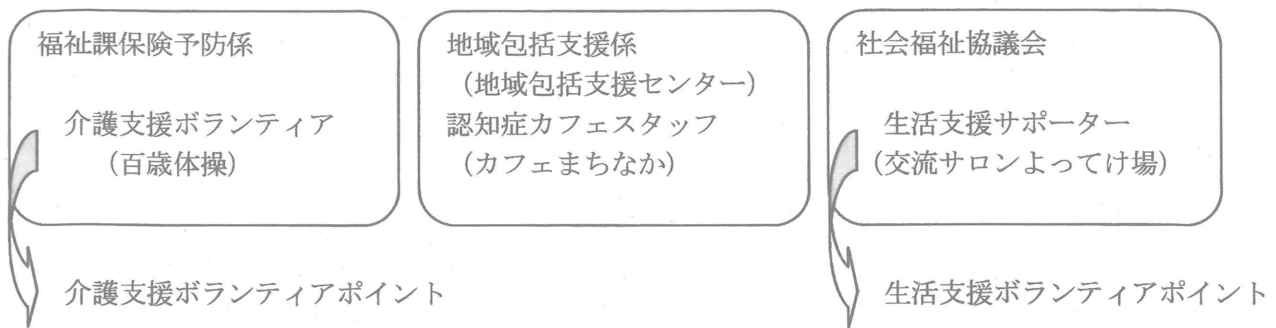
	R1.10.1	H27 国調	H17 国調	H7 国調	S60 国調
人口	2,902人	3,479人	4,770人	5,852人	9,459人
65歳以上人口	1,467人	1,654人	1,805人	1,662人	1,358人
(高齢化率)	50.6%	47.5%	37.8%	28.4%	14.4%
北海道		29.1%	21.4%	14.8%	9.7%
国		26.6%	20.1%	14.5%	10.3%
75歳以上人口	852人	939人	904人	685人	385人
(高齢化率)	29.4%	27.0%	19.0%	11.7%	4.1%
北海道		14.3%	9.7%	5.6%	3.4%
国		12.8%	9.1%	5.7%	3.9%
15歳未満人口	182人	258人	455人	627人	1,575人
(年少率)	6.3%	7.4%	9.5%	10.7%	16.7%
出生数	12人 (H30年度)	7人	24人	41人	67人

(出生数は各年度：住民基本台帳)

### (2) 三位一体で進める 地域づくりの背景

#### ①地域の声を具現化へ

平成29年度のボランティア組織が各所属で林立し、町民にとって個々の制度が分かりづらくなっていた。



## ②組織機構の再編

平成30年度から福祉課と地域支援推進室の所属長が兼務となり、より横断的に連携を行うようになった。

## ③ボランティア連絡会議

平成28年10月に生活支援体制整備を構築するために設立されたがその後、平成29年3月から活動が休止状態となっていたが意思、方向性の統一を図る会議体として再活用し連絡調整が行われている。

(不定期開催)

構成員：福祉課長、同課保健予防係長、保健師

地域支援推進室長・同係長・保健師、

社会福祉協議会事務局長・SCほか

## (3) 三位一体で進める 地域づくりの取り組み

### ①住民から見て分かりやすいように

- ・名前を「上砂川町ケアサポーター」に一本化
- ・問い合わせ等受付窓口、ポイント管理を一元化（現在も整備作業中）
- ・平成30年度ケアサポーター養成講座、社会福祉大会を協働で開催
- ・各々が得意分野で力を発揮し、協力し合おう。

### ○ケアサポーター養成講座

- 第1回（6月 3日） 認知症の人と対話しよう
- 第2回（6月26日） 福祉とお金 ～え？それタダでいいの？～
- 第3回（7月12日） めざせ！つやつやシニア～3本の矢でフレイル予防～
- 第4回（8月30日） あなたにもできる！介護術教えます！
- 第5回（9月24日） 介護体験者の話を聞いてみよう
- 第6回（10月1日） 災害多発時代を皆で生き残ろう！

### ②ケアサポーター活動 1

- ・百歳体操
  - ・活動は9年目。町内8カ所、9グループで週1回開催中。
  - ・筋トレやカミカミ体操で身体・口腔機能向上、フレイル予防！
  - ・ワイワイ楽しくやっています。

ケアサポーターの役割

参加者名簿やポイントカード等管理、会場設営、声かけなど

参加者人数

平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年（前半）	令和元年（後半）	・年 1 回
61人	60人	55人	57人	全町大会開催

③ケアサポーター活動 2

- ・カフェまちなか

認知症カフェ 月 1 回開催。

認知症の人が自分らしく過ごせ、役割を持てる場。

平成 30 年度、全国キャラバンメイト連絡協議会にて表彰を受けました。

- ・ケアサポーターの役割

会場設営、アメニティ等の企画や作成、配膳、認知症の方への声かけやアクティビティサポートなど

- ・カフェまちなか 2 号店（下鶴）、カフェまちなか 3 号店（鶴本町）も平成 30 年度から実施されている。

④ケアサポーター活動 3

- ・よってけ場

サロン活動 月 1 回開催中。

交友関係を広げる事、生活支援活動を話し合う事が主な目的。

- ・ケアサポーターの役割

町内の福祉課題に関する話し合い、事業の企画・実行・評価・改善

⑤三位一体の効果

- ・ボランティア登録数（活動者分母）の増加

- ・ボランティア活動の選択肢が増加

→活動者同士で互いに誘い合うようになり、人の行き来が活発になった。

自分に合う活動を自ら選択するようになった。

- ・情報共有機会の増加

→活動のバッティングや活動者の取り合いが少なくなった。活動の融合も生まれた（まちなか 2 号店）

⑥今後の課題

- ・住民主体 ・活動者の高齢化 ・後継者、後継システム

3. 土幌町保健福祉課

(1) 基本となる計画

- ・第 3 期地域福祉計画（H28～R2 年度）

社会福祉法第 107 条に基づく「市町村地域福祉計画」であり、「第 6 期町づくり総合計画」の部門別計画としての性格を持つ。基本理念のもと、基本目標・重点課題

にのっつた、20の施策を体系として持つ。

まちづくりへの町民参画を促し、町民の生活全般にわたる福祉の向上を図ることを目的としている。下位計画として、「高齢者保健福祉計画・第7期介護保険事業計画」、「障がい者福祉計画・第5期障がい福祉計画」などがある。

・第5期地域福祉実践計画（H28～R2年度）

地域での組織化を具体的に進めていく「共助」の性格をより明確にした計画として、士幌町社会福祉協議会が策定する。

士幌町と社会福祉協議会が基本理念を共有し、社会福祉協議会のノウハウを活かしながら計画を実践に移せるよう、両計画の整合性を保ちながら一体的に策定された。

(2) 地域包括ケアシステムの構築～相談支援体制の整備（地域福祉計画抜粋）

主 体	主な取り組み
自分や家族ができること	地域の相談窓口である「地域包括支援センター」へ相談します。地域に関わり合いのある（地域の民生委員等）に相談します。
地域においてできること	声かけ、見守りなどの支援に努め、民生委員・行政や専門機関などにつなぎます。
社会福祉協議会が取り組むこと	生活支援コーディネーターとして、高齢者の生活支援、介護予防サービスの体制整備を推進していくことを目的に地域における取組を総合的に支援します。
行政が取り組むこと	地域包括支援センターが主体となり、高齢者や障がい者が住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるように、各関係機関と連携し必要な援助・支援を推進します。

(3) しほろ日常生活支援 「たすけ愛」

新たな「住民参加の助け合い活動のしくみ」として平成31年4月より開始。

生活支援サービスを受けたい人（利用会員）とお手伝いしたい人（協力会員・たすけ愛サポーター）が社会福祉協議会に会員登録を行い、会員相互の信頼関係と助け合いの精神をもとに、日常生活の中での「ちょっと困った」を支援する仕組み。

## 第5 所 感

士幌町では、「地域福祉計画」「地域福祉実践計画」を基本としたなかで、町と社会福祉協議会が基本理念『支え合いで、安心安全を共感するまち』を共有し、連携して計画の実践に努めている。地域包括支援センターが相談窓口となり多岐にわたる事業に取り組んでおり、生活支援コーディネーターが中心になって、住民主体で支え合いの地域づくりが推進されている。

札幌市 MOE ホールディングス「フルールハピネスていね」では、「老健施設はただ日々老いていき亡くなるだけの施設であってはいけない。」という考えのもと、一般社団法人「モエ de ワーク」が設立され、利用者のうち登録した方を対象に経験残存能力を評価し役割や仕事を提供している。高齢者が施設に入所しても「社会で活躍し続ける仕組みの構築」を目標に取り組まれている。本町にある特別養護老人施設において、視察した施設の取り組

みを既存サービスに加えていくことは、現状の介護度等を考えると困難である。しかし、高齢者が生きがいを持てる活動や環境づくりは、課題の一つとして今後も検討していく必要がある。

上砂川町は高齢化率が50%を超える町で、地域の声がきっかけで多くのボランティア組織を統合し、「ボランティア連絡会議」を意思・方向性の統一を図る会議体として活用し、地域から見て分かりやすい事業展開ができるように取り組んでいる。高齢者のボランティア組織である「ケアサポーター」の養成も積極的に行われ「出来る事を出来る分だけ」を合言葉に各種事業の展開がされており、高齢者が自ら街づくり活動に参画することにつながられていた。

本町で実施されている日常生活支援事業は、平成31年度から開始され、事業の課題やその対策について自己評価する時期を迎えている。今後「利用者・協力者」双方の会員が増加し「互助」が充実していくことを期待するが、更に幅広い層のボランティアが大きな負担なく参加できる仕組みと考え方の普及、課題解決に向けた検討が必要と考える。

今後は、「めざすところは同じ、視点は多い方が良い」という考えのもと、横断的な情報共有と事業の展開がなされ、より多くの高齢の方が生きがい・やりがいを感じ、人と人が更につながる町になることを望む。

